# 地域在住外国人に対する日本語ボランティア養成講座における脱「日本語教師養成講座」の試み

桑原陽子

**要旨**

本稿では，筆者が講師を担当している日本語ボランティア養成講座のシラバスについて，2006年から2010年までの５年間の変遷を総括する。当初，日本語教師養成講座の性格が強いシラバスであったが，様々な形で日本語学習支援に携わる人材を養成する入門講座を目指し，シラバスの改訂を図ってきた。具体的には，日本語学・日本語教育学関連の講義を減らす一方，自分自身の言語活動を内省する活動を取り入れた。さらに，初級日本語学習者と直接話すことを通して，限られた日本語でコミュニケーションをする難しさを体験する機会を複数回設けた。そのような活動は，日本語学習支援を通した外国人とのコミュニケーションのあり方を学ぶためのものであると言える。

**キーワード：日本語ボランティア　養成講座　地域在住外国人**

## １．背景と本研究の目的

現在，地域在住の日本語学習支援活動を担っているのは，主に地域の日本語ボランティアで，そのような日本語ボランティアは，地方自治体などが主催する日本語ボランティア養成講座などを経ていることが多い（e.g.，深澤・中河・松岡，2006；西口，2008；米勢，2006）。福井県もその例外ではなく，日本語ボランティアによる支援活動が日本語学習支援の中心であり，福井県国際交流協会をはじめ，各市の国際交流協会やＮＧＯ団体が主催する日本語ボランティア養成講座が開かれている。

筆者は，2006年から福井県国際交流協会主催「日本語指導ボランティア養成講座」の講師を担当した。同講座は，福井市のベテラン日本語ボランティアとの共同講義である。福井市は，ボランティアが日本語学習支援のほとんどを担っている地域であるため，日本語ボランティアには日本語教師としての役割が求められることが多い。実際に日本語ボランティアに対して「教科書を使ってきちんと勉強したい」という外国人学習者からの要望が多いと耳にする。そのため，筆者が担当した「日本語指導ボランティア養成講座」は，当初「教え方」を重視した日本語教師養成講座のダイジェスト版[注1]と言えるものであった。

その一方で、受講生は日本語教師になりたいわけではなく，「なんとなくおもしろそうだから」「外国人との交流に興味がある」等の気持ちから講座に参加していることが多い。「外国人とコミュニケーションしたい」という気持ちがあり，その手段として「日本語を勉強する手伝いができるならやってみたい」と考えている受講生も少なくない[注2]。そのような日本語ボランティア活動に対する興味・関心を持続させ，積極的な活動参加を促すことも，講座の重要な目的である。

しかし，日本語教師養成講座のダイジェスト版の講座は，必ずしも受講生の期待に添えず，せっかく日本語ボランティアに関心を持っていても「自分にはできない。難しすぎてついていけない」といった挫折感を抱かせる恐れがある。

このような背景をふまえ，2006 年以降，講座の内容はどうあるべきかについて担当講師間で議論しながら，少しずつ講義内容を改訂し，日本語教師養成講座のダイジェスト版から，日本語ボランティア入門講座への移行を図ってきた。本稿では，同講座の５年間の変遷について総括し，地域在住の外国人に対する日本語学習支援ボランティアを希望する受講生が講座で何を学ぶべきかについて考察する。

## ２．日本語指導ボランティア養成講座および日本語ボランティア入門講座の概要

筆者が担当した福井県国際交流協会主催「日本語指導ボランティア養成講座」(2006 年度～2009 年度）および「日本語ボランティア入門講座」（2010 年度）の概要とその内容の変遷についてまとめる。概要は，同協会が作成した講座の受講生募集案内による。

### ２－１．講座の概要

応募資格　（１）福井県内在住で 18 歳以上の方

（２）「基礎Ⅰ」修了後，「基礎Ⅱ」の講座を受講することが可能な方

（３）講座修了後，日本語指導ボランティアとして活動できる方

（４）外国人の場合は，日本語能力試験１級に合格している方。

募集定員：30 名／回数：基礎Ⅰ全８回，基礎Ⅱ全８回／時間：午前１時～４時（最終回のみ）午前１時～５時

講座では，2006 年度以前から『みんなの日本語初級』をメインテキストとし，同教科書でとりあげられている文型・文法，表現の教え方を中心に講義をおこなっている。それは，講座を主催する福井県国際交流協会が開設する外国人のための日本語教室で『みんなの日本語初級』が使用されていることによる。そのため，2006 年以降も，『みんなの日本語初級』の教え方を講座の中心にする方針が引き継がれている。

### ２－２．講座内容の変遷

表 1 は 2006 年度「日本語指導ボランティア養成講座　基礎Ⅰ」（全８回）の講義内容である。「基礎Ⅰ」で『みんなの日本語初級１』の講義を終え，「基礎Ⅰ」に続く「基礎Ⅱ」（全８回）で『みんなの日本語初級２』をすべて取り上げた。

１回３時間の講義のうち，前半１時間半で『みんなの日本語初級』の各課の文型・文法を解説し，後半の１時間半で「トピック」に挙げられているような教科書から離れた日本語学・日本語教育学関連の内容について講義を行う。第７回と第８回では，文型導入から練習までの簡単な教案を作成し，受講生どうしでミニ模擬授業を行った。

講師は，筆者と日本語ボランティア１名で，第２回のみ日本語ボランティアが担当し，残りの７回はすべて筆者が担当している。

表１　2006 年度日本語指導ボランティア養成講座　基礎Ⅰ学習内容

| | 日時 | 教科書『みんなの日本語初級１』 | トピック |
|---|---|---|---|
| 1 | ５月14日 | 第１～２課 | ①日本語教育とは<br>②『みんなの日本語初級』について<br>（副教材の紹介，課の構成）<br>③日本語の品詞，文構造，文体について |
| 2 | ５月21日 | 第３～６課 | 日本語ボランティアとは |
| 3 | ６月11日 | 第７～９課 | 音声①：発音 |
| 4 | ６月18日 | 第10～13課 | 音声②：アクセント，イントネーション |
| 5 | ７月２日 | 第14～16課 | 文字：ひらがな，カタカナ，漢字 |
| 6 | ７月９日 | 第17～19課 | 日本語の動詞について（種類と活用） |
| 7 | ７月23日 | 第20～22課 | 教案作成 |
| 8 | ８月20日 | 第23～25課 | 模擬授業 |

＊網掛け部分は日本語ボランティアによる講義

表１から，2006 年度は講義内容が多く，「教案作成」「受講生どうしの模擬授業」が含まれ，日本語教師養成講座のダイジェスト版の性格が非常に強いことがわかる。

次に，2009 年度の「基礎Ⅰ」の講義内容を表２に示す。

表２　2009 年度日本語指導ボランティア養成講座　基礎Ⅰ学習内容

| | 日時 | 教科書『みんなの日本語初級１』 | トピック |
|---|---|---|---|
| 1 | ５月17日 | テキスト<br>第１～３課 | ①日本語教育とは<br>②『みんなの日本語初級』について<br>（副教材の紹介，課の構成） |
| 2 | ５月24日 | ボランティアクラスでの指導法<br>第１～３課 | 日本語ボランティアの役割<br>ひらがなの指導法 |
| 3 | ６月７日 | テキスト<br>第４～７課 | 入門期の学習者に対する日本語サポート①<br>「漢字の学習支援」 |
| 4 | ６月14日 | ボランティアクラスでの指導法<br>第４～７課 | ビデオで見る指導練習法のいろいろ |
| 5 | ６月28日 | テキスト<br>第８～11課 | 入門期の学習者に対する日本語サポート②<br>「教科書から離れたサバイバル会話」 |
| 6 | ７月５日 | ボランティアクラスでの指導法<br>第８課～11課 | 日本語の音声「発音，アクセント，その他」 |
| 7 | ７月19日 | テキスト<br>第12～14課 | 入門期の学習者に対する日本語サポート③<br>「日本語の動詞の活用」 |

| | 日時 | 教科書『みんなの日本語初級１』 | トピック |
|---|---|---|---|
| 8 | 7月26日 | ボランティアクラスでの指導法<br>第12～14課 | 導入のワークショップ<br>「外国人の人と話してみよう」 |

＊網掛け部分は日本語ボランティアによる講義

表１と表２を比べると，2009 年度は 2006 年度から講座の内容が大きく変わっていることがわかる。主要な変更点は以下の通りである。

（１）教科書の取り扱い範囲：「基礎Ⅰ」は『みんなの日本語初級１』の前半のみを扱う。

2007 年度から「基礎Ⅰ」「基礎Ⅱ」を通して『みんなの日本語初級１』のみ講義対象とし，『みんなの日本語初級２』は取り上げないこととした。これは，受講生の負担の大きさを考えてのことである。

（２）担当講師：筆者と日本語ボランティア３名が交代で担当する。

全８回のうち，奇数回を筆者が，偶数回を日本語ボランティアが担当し，テキストの同じ課について２回連続で講義を行った。まず奇数回で，各課の文型・文法について意味・用法を中心に講義を行い，偶数回では具体的な教授方法，絵カードの使用方法や練習方法などを紹介した。

（３）ワークショップ：外国人学習者を講座に招く。

2009 年度は数名の外国人学習者を講座に招き，受講生が直接学習者と話す機会を設けた。さらに，基礎Ⅱでは，受講生を数名のグループに分け，グループごとに外国人学習者に日本語を教える経験をした。この試みは 2009 年度に初めて取り入れられた。

（４）トピックの内容：日本語学，日本語教育学の概論を減らす。

受身的な講義を減らす代わりに，様々な活動を取り入れて，日本語ボランティアについて具体的なイメージがつかめるような工夫をした。

次に，表３に 2010 年度の「日本語ボランティア入門講座　基礎Ⅰ」の学習内容を示す。2010 年度には，講座名が「日本語指導ボランティア養成講座」から「日本語ボランティア入門講座」に変更され，それに伴い講座の内容も再考された。教科書の教え方に重点をおくのではなく，教科書にとらわれすぎることなく，学習者のニーズに合わせた支援のあり方を考えることを重視した。

まず，これまで筆者が担当してきた第１回目の講義を日本語ボランティア講師が担当し，ボランティアとしての支援について学ぶ講座であることを，受講生に印象づけようとした。さらに，学習者の立場を経験するため，講師役に福井在住のブラジル人を招き，ポルトガル語講座を行った。

表３　2010 年度日本語ボランティア入門講座　基礎Ⅰ学習内容

| | 日時 | 内容 |
|---|---|---|
| 1 | ５月22日 | 日本語ボランティアの役割<br>外国語学習体験「知らない言葉を学んでみよう」（ポルトガル語講座） |
| 2 | ５月29日 | 日本語学習とは<br>『みんなの日本語初級』について（副教材，課の構成）<br>テキスト　第１～４課 |
| 3 | ６月５日 | 実践練習（第１～４課） |
| 4 | ６月12日 | テキスト第５～８課<br>かなの学習 |
| 5 | ６月26日 | 実践練習（第５～８課）<br>外国人学習者にとってわかりやすい話し方とは |
| 6 | ７月10日 | テキスト第９～12課<br>教科書から離れてサバイバル会話を考える |
| 7 | ７月17日 | 実践練習（第９～12課）<br>ワークショップ「外国の人と話してみよう」 |
| 8 | ７月24日 | テキスト第13～14課 |

＊網掛け部分は日本語ボランティアによる講義　＊講義時間は第７回のみ４時間で後は３時間

このように，2006 年度から 2010 年度までの間に，日本語学・日本語教育学関連の講義内容と、講座中に解説される文法項目が激減している。それに代わって，日本語ボランティアとしてより具体的な活動を意識した内容が増加している。では，次に，2010 年までに「基礎Ⅰ」および「基礎Ⅱ」で新たに取り入れたいくつかの活動の詳細をまとめる。

## ３．講義に取り入れた活動の詳細

### ３－１．自分の言語活動を内省するための活動

ほとんどの受講生が，この講座を受講する前に外国人用日本語教科書を見たことがなかったため，当初は『みんなの日本語初級』の文型・文法の解説に時間が割かれがちであった。しかし，教科書で取り上げていない場面の中にも，学習ニーズの高いものは多数存在する。さらに，教科書の練習で使われる文型･表現は,実際に自分が使用している表現とは大きく異なることが多い。そこで，教科書にない場面や教科書の会話練習の場面で，自分なら普段どのような表現を使っているかを内省する活動を可能な限り取り入れた。

**事例１**　自分の言語活動を振り返る１：サバイバル会話「ファミリーレストラン入店」

目標：ファミリーレストランに入店する際に店員との間で交わされる会話を再現し，学習者が最低限何を知っていればスムーズに入店できるかを考える。

活動：

（１）レストランに入ってから席に案内されるまでに行われる店員とのやりとりを，受講生ひとりひとりが文字化する。受講生どうしで見せあい，加筆・修正する。

（２）全体で，店員の発する日本語表現とそれが発せられる順番を確認し，これを聞いて理解するためのキーワードは何か話し合う。確認された表現とキーワード（下線）は次の通りである。「いらっしゃいませ」「何名様ですか」「おタバコをお吸いになりますか」「禁煙，喫煙どちらがよろしいでしょうか」「少々お待ちくださいませ」

（３）（２）のキーワードを聞きとり，それに対して答えられるようになる練習をすればレストラン入店はスムーズにいくこと，説明を求められなければ「お吸いになりますか」のような表現について文法的説明をする必要はないことを確認する。

同様の活動を，学習者が利用する可能性が高い「コンビニでの買い物」でも行った。

**事例２**　自分の言語活動を振り返る２：『みんなの日本語初級』練習Ｃを利用した活動

目標：17 課練習Ｃの断りの会話について，自分ならどのような断り方をするか意見交換する。それを通して，「断り」に使用される自然な表現は何かを考える。

活動：

（１）以下の会話について，自分がＢならどう答えるか受講生どうしで話し合う。

Ａ：ご飯を食べに行きませんか。

Ｂ：すみません。これから銀行へ行かなければなりません。

Ａ：そうですか。　　（『みんなの日本語初級１』17 課練習Ｃ２）

下線部について，次のような回答が得られた。「これから銀行へ行かなくてはいけなくて…」「これから銀行へ行かないといけないんで…」「これから銀行へ行くんですよ」「ちょっとこれから用事があって…（言及を避ける）」。

「なければなりません」と言い切ることはほとんどないこと，「ないといけない」「なくてはいけない」などのバリエーションを用いる場合も多いこと，必ずしも学習項目の「なければなりません」を使わないことなどを確認した。

（２）（１）で挙げられた表現の中で，どれを学習者に紹介して練習するとよいか話し合う。

講師は，受講生から意見を引き出しながら，学習者の負担を減らすことと，自然な表現を選ぶことが重要であることを伝える。自然さを決める際には，学習者の年齢や社会的立場にも考慮が必要なことを確認する。

教科書の練習Ｃを利用してこのような活動を繰り返す中で，教科書中の会話練習に対して，常に「自分ならどう言うか」を意識することと，それを学習者にどのように紹介するべきかを考えることが大切であることを確認した。

### ３－２．外国人が日本語を学ぶことに対して具体的なイメージを形成するための活動

受講生は外国人に対する日本語学習支援の経験がなく，『みんなの日本語初級』を学ぶ学習者がどのような日本語を話すのかについてイメージできないという声が聞かれていた。そこで，以下の活動を講座に取り入れた。

**事例３**　初級学習者の会話ビデオ視聴

目標：『みんなの日本語初級』を学習中の外国人学習者が日本語で話しているビデオを視聴し，学習者について具体的なイメージを持つ。

教材：『みんなの日本語初級』で勉強中の学習者の協力を得て，以下のビデオを作成した。

（ａ）筆者と学習者２名との自由会話を撮影したもの

（ｂ）（ａ）と同じ学習者がインフォメーションギャップを用いたタスク練習を行っている様子を撮影したもの。タスクは，『コミュニケーションゲーム 80』の「07 どこにありますか」を使用した。

（ｃ）４名の学習者とベテラン日本語教師１名の自由会話を撮影したもの。使用文型は『みんなの日本語初級１』11 課まで。

活動１：

（ｂ）のビデオ中で使用されたタスクを受講生どうしで行った後，（ａ）（ｂ）を視聴する。

活動２：

（１）学習者の日本語学習歴や母語などを解説した後（ｃ）を１回視聴する。

（２）学習者の使っている日本語について，筆者が適宜解説しながら再度視聴する。

（３）学習者と会話している日本語教師の話し方に注目しながら，再度視聴する。

活動１，活動２を通して，受講生は，実際の初級学習者がどのような話し方をするのかについてイメージを持つことができた。さらに，活動２の（３）で，ベテラン日本語教師による簡潔でわかりやすい話し方の例を示した。特に，学習者が教師の発話を理解できなかった時，どのように言い換えて学習者とのコミュニケーションを成功させるか詳しく観察した。

**事例４**　日本語学習者を招いて行うワークショップ「ミニ授業」

目標：外国人学習者を数名講座に招き，彼らと直接日本語で話し，簡単な日本語を教える経験をすることによって，日本語で意思の疎通を図ることの難しさを知る。

活動：

（１）「基礎Ⅱ」の第７回で，次回（第８回）に行うミニ授業の課題を出す。まず，受講生を数名のグループに分け，招く予定の外国人学習者を１名ずつ振り分ける。グループごとに文法項目やタスクを１つずつ与え，それをどうやって学習者に教えるか，練習のための活動を次回までに考えてもらう。課題の文法項目やタスクは，外国人学習者をよく知っている日本語ボランティア講師が，学習者の特徴に合わせて決定した。

（２）「基礎Ⅱ」第８回（最終回）で，まずグループで１つの練習活動案を仕上げる。

（３）外国人学習者がグループに参加し，自己紹介後，簡単なミニ授業をする。

（４）各グループから代表が前へ出て，全員の前でもう一度ミニ授業をやってみる。

事例４は，ミニ授業という形式をとってはいるが，「上手に教える」ことよりも，むしろ「学習者とのコミュニケーションを成功させる」ことを重視している。そのため，（３）のグループ活動中は，与えられた学習項目を「教える」活動だけでなく，日本語，時には媒介語や筆談を用いての自由会話が行われていた。事例４以外にも学習者を講座に招き直接話す機会を設けたが，

それらの目的は，共通の言語を持たない者どうしが意思の疎通を図る難しさを経験することである。このような実体験を通して，受講生は自分の話し方を振り返り，「どのように教えるか」の前に「どのようにコミュニケーションするか」が重要であることに気づくことができると考える。

## ４．まとめ

本稿で総括した講座は，『みんなの日本語初級』をメインテキストに取り上げその解説をしている点で，「教え方」を重視した講座であることは否定できない。その上で，2006 年度以降の講座の課題は，様々な形で日本語学習支援に携わる人材養成講座の側面と，日本語教師養成講座の側面とをバランスよく両立させることであった。それは，「初級日本語教科書の文法とその教え方を学ぶ」ための時間を減らし，「日本語学習支援を通した外国人とのコミュニケーションのあり方を学ぶ」ための活動を増やすことであったと言える。

具体的には，３節で述べたように，自分自身の言語活動を内省する機会を取り入れ，自分の言語活動に対する意識化を促した。自分の使用する日本語の表現と教科書に出てくる文型・表現とが異なることを知ることは，「どのような表現を使えば学習者に『通じる』か」を知ることにつながるであろう。また，実際の学習者の様子をビデオで見る，初級学習者との日本語によるコミュニケーションに慣れているベテラン日本語教師の話し方を観察するなどの活動を通して，学習者とのコミュニケーションに対して具体的なイメージを持てるようにした。さらに，学習者を講座に招いて直接話す機会を作り，限られた日本語でコミュニケーションするには，自身の話し方を変えなければならないことを実体験してもらった。このような活動を通して受講生の意識がどのように変わったのかについては，聞きとり調査などによって確認していかなければならないが，受講生からの反応はこちらが期待する以上のように感じられる。

今後は，受講生に対する聞き取り調査だけでなく，受講終了後，実際に日本語学習支援活動を開始した日本語ボランティアに対する追跡聞き取り調査を行うなど，この講座で学んだ内容がその後の活動に生かされているのかどうかについて，データを収集していくことが必要であろう。

注１．「日本語ボランティア養成講座のダイジェスト版」は，深澤他（2006）による。
注２．筆者が講義初回に受講生に対して行った自由記述による「講座を受講した動機」のアンケートによる。

## 引用文献

西口光一（2008）「市民による日本語習得支援を考える」『日本語教育』138，24-32.
深澤のぞみ・中河和子・松岡裕見子（2006）「地域在住外国人に対する日本語ボランティアの養成シラバス」『富山大学留学生センター紀要』5，1-16.
米勢治子（2006）「外国人住民の受け入れと言語保障―地域日本語教育の課題－」『名古屋市立大学大学院人間文化研究科　人間文化研究』4，93-106.

地域在住外国人に対する日本語ボランティア養成講座における脱「日本語教師養成講座」の試み

# Revision of the syllabus for a training course of “Japanese language volunteers” for foreign residents

KUWABARA Yoko

Keywords: Japanese language volunteer, training course, foreign residents

This article shows the changes to a training syllabus for Japanese language volunteers for foreign residents in Fukui city from 2006 to 2010. The author was in charge of the conduct and evaluation of this course. The syllabus had been close to the training syllabus for “Japanese teachers” in 2006. However, the syllabus was revised because the course was re-envisioned as a guide training course for Japanese language “volunteers”, who can participate in various supporting activities. Activities focusing on reflective-learning of languages were increased, instead of lectures on Japanese grammar and Japanese education. Furthermore opportunities for the attendants to have experiences of difficulties of communication with limited language proficiency were arranged in the course. Overall, the purpose of such activities is the study of how to communicate with foreign residents through supporting the learning of Japanese.